

外国人人材拡大プレイス シンポジウム

自己紹介・発言

社会福祉法人 一陽会 熊谷仁志

社会福祉法人一陽会の熊谷仁志と申します。長野県飯田市で高齢者福祉事業を中心とした法人運営に携わっております。本日はこのような機会をいただき、誠にありがとうございます。

私どもの社会福祉法人一陽会は、地域医療と福祉をつなぐ理念のもと設立された法人です。理事長熊谷嘉隆は長年、地域の中核病院で消化器外科医として勤務し、多くの手術を執刀してきました。執刀を退いた後は診療所で在宅医療に取り組み、およそ 200 人ほどの患者さんの往診診療を経験しました。

在宅医療の現場では、高齢の患者さんが住み慣れた地域で生活を続けていくためには、医療だけではなく、日常生活を支える福祉の力が不可欠であることを痛感しました。そうした経験から、医療と福祉が連携しながら地域を支える仕組みをつくりたいという思いで、社会福祉法人一陽会を立ち上げてきました。

現在、理事長は熊谷クリニックを開院し、毎日 60 人余の外来患者の診療にあたりながら、往診医療も続けています。

一陽会としては、特別養護老人ホーム、デイサービス、グループホーム、サービス付き高齢者向け住宅、認定こども園などを運営し、地域の高齢者から子どもまで幅広い世代の生活を支える取り組みを行っています。現在、法人全体の職員数は 120 人を超える規模となっています。

一方で、私自身は若い頃、重度身体障がい者施設で 11 年間勤務し、障がい者支援の現場から仕事をスタートしました。その経験を通して強く感じたのは、社会の中には常に一定数、少数派として様々な困難を抱えている方々が存在するということでした。

障がいのある方々、高齢者、そして外国籍の方々もまた、社会の中では少数派として様々な壁に直面することがあります。私はこれまでの経験から、福祉の仕事とは「社会の中のマイノリティーの権利を守る営み」と考えるようになりました。

その意味で、外国人材の受け入れについても、単なる労働力確保の問題ではなく、多文化共生社会を築いていく取り組みであり、社会の中で少数派として生きる人々の権利を尊重する営みでもあると考えています。

現在、日本の介護現場では人材不足が深刻化しており、外国人材の存在はますます重要になっています。私たちの法人でもネパールなどから特定技能の介護職員を受け入れています。彼女たちは日本語の習得や介護技術の向上に真剣に取り組み、今では施設にとって欠かせない大切な職員となっています。

その象徴的な出来事として、長野県で開催されたネパールと日本の国交 70 周年のイベントとして行われた日本語スピーチコンテストに、当法人のネパール人職員が参加しました。日本に来てまだ 1 年半ほどという短期間にもかかわらず、日本語を懸命に学び、その結果、最優秀賞と準優勝という素晴らしい成績を収めました。

この出来事を通して、私が強く感じたのは、外国人材という言葉の向こう側には、一人ひとりの努力や人生があるということでした。彼女たちはこの地域で働き、学び、成長しながら、すでに私たちの職場や地域社会の一員となっています。

地方の介護現場では、外国人材はすでに「未来の話」ではなく、「今の仲間」です。ともに働き、ともに学び、ともに地域を支える存在として、私たちの日常の中に自然に溶け込んでいます。

もちろん、外国人材の受け入れには言語や文化の違い、生活支援、教育体制など様々な課題もあります。しかし、それを乗り越えて共に働く中で、職場や地域社会には新しい活力が生まれていることもまた事実です。

私たちの暮らす長野県飯田地域は、古くから外から来た人を受け入れながら地域を築いてきた土地でもあります。そうした風土があるからこそ、外国人の方々も地域の仲間として自然に受け入れていく文化が根付いているのではないかと感じています。

これからの日本社会では、外国人の方々と共に地域を支え合う社会づくりがますます重要になると思います。そのためには、外国人を単なる「働き手」として見るのではなく、地域の中で共に暮らす生活者として迎え入れ、互いに理解を深めながら支え合っていくことが大切だと感じています。

外国人と日本人という関係ではなく、同じ地域に暮らす「生活者」として支え合う社会をつくること。それがこれからの地域福祉の姿であり、私たちが目指す多文化共生社会の形ではないかと考えています。

本日の討論では、地方の福祉現場で外国人材を受け入れている立場から、現場で感じている課題や可能性について、皆様と率直に意見交換ができればと思っております。

どうぞよろしくお願いいたします。